

令和元年10月2日

資料へのお問合せ先

奈良市教育委員会 教育部

文化財課 史料保存館

電話 0742-27-0169

史料保存館 企画展示

奈良奉行梶野良材と奈良

18世紀末から19世紀にかけての近世後期、全国的にききんが度々起こり、一揆や打ちこわしが各地で頻発するなど、社会全体が動揺し、幕藩体制にもきしみが生じてきます。

このような時期にあたる天保2年（1831）から天保7年（1836）まで奈良奉行を務めたのが梶野土佐守良材（かじのとさのかみよしき）です。梶野は幕臣としては微禄の家の出身でしたが、才覚を表して禁裏付や奈良奉行、京都町奉行を歴任、天保の改革を行った水野忠邦の信頼を得て、勘定奉行に抜てきされた人物です。

梶野は学問を好み、古物にも親しんだ文人肌の人物で、奈良や京都に在職していた10年余りの見聞を「山城大和見聞随筆」「笠置紀行」などの随筆として書き残しています。

今回の展示では、梶野が幕府の責任者として監督した正倉院宝庫の修理と、奉行所附属の学問所、明教館の設立という2つの事績を中心に、梶野良材の奈良奉行時代を紹介します。

1. 開催概要

会場 史料保存館 展示室（奈良市脇戸町1-1）

会期 令和元年10月8日（火）～令和2年1月5日（日）

開館時間 午前9時～午後5時（入館は午後4時半まで）

休館日 月曜日・祝日の翌平日（祝日は開館）
10月15日（火）・23日（水）
11月5日（火）・12月29日～1月3日（金）
休館

入館料 無料

展示解説 史料保存館で、館員による展示解説を2回行います。約30分の予定。申し込みは不要です。

[日時] ①11月9日（土）午後1時半～
②12月17日（火）午後1時半～



史料保存館・奈良町にぎわいの家の場所

2. 展示の見どころ

梶野は天保3年(1832)に、奈良奉行所附属の学問所、明教館を設立します。幕末の奈良に設けられた唯一の公的な教育機関で、生徒は奉行所の与力・同心らの子弟が中心でしたが、庶民も受講できたといえます。その資料は現在ほとんど残っていないようですが、今回の展示では、玄関に掲げられたという「明教館」の扁額、梶野本人の筆による「懋哉(つとめよや)」の扁額、館の規則「学規」などの数少ない遺品を展示します。

天保4～7年(1833～1836)には、梶野が幕府の責任者として元禄6年(1693)以来、140年ぶりに正倉院宝庫の修理と宝物の点検を監督しました。展示する「天保四年 正倉院御開封之図」は、その時の正倉院開封の式場や、宝物点検の様子が詳しく描かれています。この時に、国学者穂井田忠友が正倉院文書の一部を調査し、「正倉院古文書正集」を編んでいます。梶野はこれを積極的に支援しています。

学問を好み、文人肌であった梶野は、友吉という青年に絵画の才能を見出しました。この友吉が、後に中新屋町に住んだ森川杜園であり、杜園の名も梶野が贈ったものです。森川杜園は「三職」と称して、彫刻(奈良人形)・狂言・画業で活躍します。展示では、梶野と交流のあった地元奈良の人として、杜園の作品(絵画)も紹介します。

こうした文化的な業績の一方、梶野は天保のききんが起こった困難な時期の奈良奉行として、人々の救済に努め、米の施行や安売りなどの触を出しています。そのことを記した東向北町の町記録「萬大帳」の記事も紹介します。

3. 展示関連イベント

①ガイド付きツアー「もっと知りたい“正倉院と奈良奉行”」

「奈良奉行梶野良材と奈良」展にちなみ、奈良奉行ゆかりの地を見学するガイド付きツアー「もっと知りたい“正倉院と奈良奉行”」をNPO法人 なら・観光ボランティアガイドの会 朱雀と共催します。

日 時 令和元年11月3日(日・祝) 午後1時半～4時(受付は午後1時～)
雨天決行(警報発令の場合は中止)

コース ならまちセンター前広場集合—史料保存館※館員による展示解説—中新屋町森川杜園旧居—興福寺南大門跡—奈良奉行所跡(奈良女子大学)—明教館跡—多門町—東大寺正倉院—東大寺大仏殿西側(解散)

費 用 200円

申 込 電話で直接、または、はがき・FAX・メールに事業名、住所、氏名(ふりがな)、年齢、電話番号を書いて
なら・観光ボランティアガイドの会 朱雀(〒630-8228 奈良市上三条町23-4
電話 0742-27-9889 FAX 0742-24-9311 Eメール suzaku97@m3.kcn.ne.jp)へ

締め切り 令和元年10月27日(日)

②にぎわいの家出張展示「タイムトラベル奈良町～奈良奉行梶野良材と奈良～」

「奈良奉行梶野良材と奈良」展開催に合わせ、展示開催を多くの人に知ってもらうために、奈良町にぎわいの家において、展示に関連した史料の一部を出張展示し、あわせて史料保存館員による史料解説を行います。

日 時 12月7日(土) 午後2時～4時
(館員による展示解説は午後2時から30分程度)

会 場 奈良市中新屋町5 奈良町にぎわいの家

費 用 無料

申 込 不要

- 4. 告知方法** 市ホームページ・twitter・関西文化.com・しみんだより10月号・チラシ配布・報道機関及び歴史街道推進協議会への情報提供、周辺施設への広報

展示予定史料

- (1) 「懋哉 (つとめよや)」扁額 明教館 梶野良材筆 江戸時代



明教館は天保3年(1832)に奈良奉行梶野良材によって設立された奈良奉行所附属の学問所です。「懋哉」の扁額は、設立者の梶野良材の筆によるもので明教館の奥の間正面に掲げられたといえます。「困難をおかし何かを求めて努力する」という意味です。

- (2) 天保四年 正倉院御開封之図 (個人蔵 寄託史料) (写真は部分)



天保4年(1833)、奈良奉行梶野良材が監督者として正倉院宝庫の修理と宝物の点検を行った時の、正倉院開封の儀式の様子と、宝物を点検の様子を詳しく描いた図です。正倉と開封の様子、四聖坊での宝物点検、正倉から宝物を運ぶ行列などいくつかの場面を1枚の絵の中に描いているところが特色です。写真は、正倉開封の場面です。

- (3) 萬大帳七番 (東向北町自治会蔵 寄託史料 市指定文化財)



「萬大帳」は東向北町の町記録です。天保のききんは天保4～10年(1833～1839)まで続き、奈良町にも大きな影響がありました。天保4年、奈良奉行梶野良材が、新米の収穫までは各々米を用意しておくこと、米屋は米の安売りをすること、生活に困るものへは施行を行うという触を出したことが記されています。

奈良奉行をはじめ、寺院、有力な商人などがこのように比較的早く救済策を取ったため、奈良では大規模な打ちこわしなどが起こらなかったようです。

(4) 森川杜園筆 群鹿図 (個人蔵 寄託史料) 〈10/8~11/24 展示〉

(5) 森川杜園筆 和歌狂言図扇面 (個人蔵 寄託史料) 〈11/26~1/5 展示〉



(4)



(5)

文政3年(1820)に生まれた森川杜園は、幼名を友吉といました。学問を好み、絵画を内藤其淵に学んだという友吉の才能を認めた梶野良材は天保7年(1836)に扶疏(ともしげ)の名と杜園の号を与えました。杜園は後に奈良人形(一刀彫)の作家として活躍、狂言師としても才能を表しました。

「群鹿図」は杜園が残した優れた絵画作品のひとつです。「和歌狂言図扇面」は、明治22年(1889)の古稀の祝いに自分の舞台姿を描き、関係者に配ったものです。